

30号に寄せて

松本 陽正

『広島大学フランス文学研究』が第30号を迎えた。30年間継続したことになる。巻末に付された第1号から第30号までの「総目次」を見ると、感慨深いものがある。

30年と言うと、一世代だ。広島大学フランス文学研究会会長も、第6号までは杉山毅先生、第7号から第24号までは原野昇先生、第25号からは不肖松本と変化していった。

研究会誌の執筆陣もまた変化した。創刊時は、かなりの数にのぼっていた大学院生の研究論文が誌面を飾っていた。しかし、院生の減少とともに、院生以外の会員の研究論文の占める比率が増大してきた。院生が激減した今、第40号に向けて歩み続けるためには、会員の積極的な研究発表と投稿とが待たれている。とりわけ、広島大学フランス文学研究会から巣立っていった会員の方々は、「原点」を忘れず、自らの「raison d'être」を忘却することなく、研究会誌の充実を担っていただきたいと思っている。

このたびの第30号記念号刊行に際し、いくつかの論文が寄せられた。また、杉山先生、原野先生からは、玉稿を頂戴した。さらには、多くの卒業生からもエッセーを寄稿していただいた。おかげで、記念号にふさわしい内容とすることができたかと思う。篤くお礼申し述べたい。

原野先生ご退職後に出した第25号は、印字のうすい、研究会誌としては少々恥ずかしい代物だった。第26号以降は、編集作業に精通している中川正弘氏に実質的な編集長としてご尽力いただきながら刊行している。中川氏の献身的な協力なくしては、第30号まで継続することは不可能だったかもしれない。末尾ながら、心よりお礼申しあげたい。